



大船渡湾を航行する「気仙丸」



【気仙丸の概要】

- 積石数：350石積み（約60容積トン・重量23トン）
- 船の長さ：18.70m（61尺7寸） ■船の幅：5.75m（19尺）
- 船の深さ：1.70m（5尺6寸） ■船の高さ：5.00m（16尺5寸）
- 敷長：11.50m（38尺） ■帆柱：17.00m（56尺1寸）
- 帆桁：11.50m（38尺） ■帆の広さ：畳85枚分（16反・綿製）
- 着工：平成3年2月、進水：平成4年5月10日、総工費：7,000万円
- 平成4年7月4日開幕「三陸・海の博覧会」（主会場：釜石市）において、高度な技術と気仙伝統の結集ぶりが評価され、気仙丸が「ジャパンエキスポ大賞」を受賞。



陸揚げ展示された「気仙丸」（令和3年10月4日より一般公開）

展示場案内図 大船渡市大船渡町字茶屋前157番10



■ お問い合わせ

大船渡商工会議所

〒022-0003  
 大船渡市盛町字中道下 2-25  
 TEL 0192-26-2141 FAX 0192-27-1010  
<http://www.ofunatocci.or.jp>



# 千石船 気仙丸

江戸海運の  
主役



岩手県大船渡市

# 江戸海運のロマン満載。伝統の一枚帆船。



平成3年2月 着工



平成4年5月10日 進水

## 「千石船」

江戸に幕府が開設されると、諸大名の参勤交代などにより大都市が形成されることになり、全国各地より米をはじめ生活必需品など物資の輸送が多くなりました。この輸送を担ったのが上方と江戸を結ぶ、菱垣廻船、樽廻船と呼ばれた弁財船でした。

寛文年間（1661～1673）川村瑞賢により「東廻り」「西廻り」の新航路が開発されると、弁財船は完全帆走による大型化が図られるようになり、江戸後期には千石積み以上の大型の弁財船も作られるようになり、大型の弁財船は「千石船」と通称されるようになりました。

気仙地方は、寒流と暖流がまじり合う三陸漁場に位置し、古くから漁撈を中心とした生活が営まれてきました。そのため、もともと造船の技術も高く、また気仙杉や五葉檜、赤松、樺などの良材にも恵まれ、船大工の出稼ぎと相まって造船技術も各地から導入され、工夫がこらされてきました。

「気仙丸」は、この造船技術を生かして、かつて太平洋沿岸を往来した千石船を復元して、釜石で開催された「三陸・海の博覧会」（平成4年）に出展し、併せてふるさとの歴史的文化遺産として後世に伝えようと大船渡商工会議所が中心となって建造資金を集め、「気仙船匠会」の手によって建造復元したものです。

「三陸・海の博覧会」の後は、海上に係留され、夏まつりなどのイベントや、NHK大河ドラマ「菜の花の沖」「龍馬伝」などのロケにも利用されていましたが、令和3年、建造から30年が経過し、船体の傷みも大きくなったため、補修、補強工事が施され、陸揚げ展示されることになりました。

# 千石船 気仙丸

け せん まる



赤崎町蛸ノ浦の湾内に係留



平成4年7月4日から「三陸・海の博覧会」出展



令和3年6月 陸揚げ展示に向けての補修作業開始